ペレストロイカの文学

現代ソビエトの文学闘争

阿部軍治

現代ソビエトの文学闘争

ペレストロイカの文学

阿部軍治

江苏工业学院图书馆
藏书章

《著者略歴》
阿部　軍治（あべ・ぐんじ）
1939年　宮城県に生まれる。
1969年　早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了，のち同博士課程単位取得退学。
現　在　筑波大学現代語現代文化学系助教授。
専　攻　ロシア文学
著　作　『徳富蘆花とトルストイ』（彩流社）
『和露分類語彙集』（共著，大学書林）
ブールソフ著『ドフトエーフスイの個性』（共訳，理想社）
チェーホフ著『谷間』（訳注書，大学書林）
トルストイ著『コサック』（訳注書，大学書林）
論　文　「トルストイの宗教思想――『戦争と平和』を中心として」その他。
現在所　茨城県つくば市並木3－670－102

ペレストロイカの文学――現代ソビエトの文学闘争――

1990年7月10日　印刷
1990年7月25日　発行

定価は，カバーに
表示してあります

著作権者との
印合せにより
検印省略

著者　阿部軍治
発行者　竹内淳夫

発行所　株式会社　彩流社
〒102 東京都千代田区富士見2－2－2
電話03(234)5931　振替・東京9－55239
印刷　(株)平河工業社
製本　(有)青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4－88202－175－7 C0097

はじめに

現在ソビエト社会ではペレストロイカにより大変動が起こっている。国の諸制度の全面的な改革が進められ、社会主義的な行政・指令的経済制度から資本主義的な企業の独立採算の経済制度への移行、一元的な国家計画経済から市場経済への切替えが推進されつつある。また、独裁的に支配して国家の荒廃をもたらした共産党の改革、党と国の機関との分離、人民主権を重視し国民に選ばれた各級レベルのソビエト（議会）への党の独裁的権力の委譲、大統領制の導入、共産党の独裁を廃しての政党の複数主義、土地の私的所有の公認などが実施されつつある。そしてまた、この国始まって以来の大幅な言論、出版、信教の自由が国民にもたらされたのである。

このような社会の大変動にともない、生活全体が、文学を含め文化全体が大きく変化してきているのだ。ジャーナリズムが例のないほど活発化して面白くなり、文学界文化界が非常に活況を呈している。ペレストロイカはまぎれもなく革命である。当然のごとくそれは賛成者たちと反対者たちとの間に熾烈な闘争を惹起し、あらゆる部門で官僚層の根強い抵抗にあっている。そしてその支持派の内部でも、その進め方をめぐってはげしい争いが起こっている。その結果、ソ連ではいまそれらが入り組んで錯綜した闘いが展開されており、ペレストロイカは経済面などで事実上あまり進捗せず、危機的な状態に陥っているのである。ソビエト社会ではそれをめぐる左派右派の対決は現在

ほとんど極限まで先鋭化し、内戦あるいは軍事的独裁も起こりかねないような状況だと言われている。そのような左右の対決は文学界の中に典型的な形をとって現われているように思う。

現代ソビエト文学は面白くない、と長い間言われてきた。ロシア文学は日本でも明治以来よく親しみ読まれ、多くの読者を獲得してきたが、ソビエト文学の方はすっかり読者にそっぽを向かれ、一部を除きほとんど読まれなくなってしまった。そのため、最近ではたいていどの出版社もすぐれたソビエト作家の物でも翻訳出版を引き受けてくれないのだ。ここにはたぶんその大きな原因として日本人の文学離れもあるであろう。しかしこの場合最大の原因はソビエトの文学作品そのものがなにしろ面白くないからなのである。もちろんすぐれた作品も存在した。だがそれは全体から見ればわずかであり、全体的に面白くないという印象を覆すまでには至っていないのだ。

かつてのロシア文学は多くの場合民衆の味方になり、ツァーリズム体制と対決する見地をとっていた。ところが、十月革命後それを受け継いだ共産党支配下のソビエト文学は体制内に組み込まれ、党と政府の宣伝物と化し御用文学になり下ってしまったのである。ソビエト作家はすべからく体制の擁護者として社会主義リアリズムなる〝創作原理〟に則って書くことを義務づけられ、いわゆる〝無味乾燥な文学〟が主流になり氾濫する仕儀になってしまったからなのだ。すぐれた面白い作品はたいがい当局のなんらかの忌諱に触れることが多いので、きびしい検閲に引っかかり、引き出しに仕舞われるか、国外出版または地下出版されるか、あるいは御意にかなうように改作されてきたのである。

ところが、ペレストロイカによってそのソビエト文学が、がぜん面白くなったのである。すなわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ち、その引き出しに仕舞われたり、〝逮捕〟されたり〝亡命〟したりしていた作品がぞくぞくと発表されるようになったのである。それ以前には国外の出版社でしか刊行されなかったような作品が国内で無修正で雑誌に掲載され、あるいは単行本として次々に公表されるようになったのだ。たとえば、きのうまで反体制的な作品として発禁になっていたソルジェニーツィンの『収容所群島』が公表され、いまや真実を描いた偉大な本と評され、「脱落者」「売国奴」として国外へ追放されたその作者は英雄として尊敬されるにいたっているのである。このような創作は文壇ではいま〝帰ってきた〟作品と呼ばれている。その文学の主潮は粛清とラーゲリに象徴されるスターリニズムの告発と清算、ソビエト的社会主義の否定的諸現象の批判である。そこではマルクスに始まる共産主義的ユートピア建設の思想と実践に対して、最終的に破産宣告が下されているように見える。人々はいまそのような作品をむさぼるように読んでいるのだ。ソビエトではここ数年友人同士が出会うと、「読みましたか」という言葉が挨拶用語のようになっているというのである。

ソ連における文学の復興は文芸誌などの発行部数の増加に端的に現われている。一九九〇年一月のそれらの発行部数をペレストロイカ以前と比較すると（括弧内は八四年の発行部数）、『新世界』誌が一六〇万（三八万）、『旗』誌が一〇〇万（一六万）、『十月』誌が三八万（一七・五万）、『民族友好』誌が一一三万（一六万）、『青春』誌が三一〇万（同数）となっている。文芸誌ではないが、これらの年間に週刊誌『ともしび』は四六〇万（一五〇万）、週刊紙『文学新聞』も数百万部に増え、週刊紙『論拠と事実』などはなんと三千四百万部と想像を絶するような部数に増大しているのである（ついでに言えば、ペレストロイカ路線をとる『コムソモールスカヤ・プラウダ』

は約一七五〇万部、『イズベスチヤ』は約一千万部を発行している)。

このようにソビエトの文学界は百八十度転換を果たし、そこではコペルニクス的な価値観の変化が起こっているのである。文学界の状況はペレストロイカによって一変し、最近まで文学のお手本と言われていた作品が批判を浴び、批判され発禁になってきた作品が持ち上げられている。この変化はまさしく革命的と呼んでいいであろう。過去に発禁になり現在公表され、そして読者に歓喜をもって迎えられている物は、総じてロシア文学の伝統の流れをくむ作品と位置づけることができるであろう。すなわち、ペレストロイカによって文壇に十九世紀ロシア文学の伝統が戻ってきつつあるのである。ソ連ではいま歴史の大々的な見直しが進められているが、文学も同じなのだ。歴史や文学史は大幅に書き換えられるだろうと予想されるのである。

このような革命的な変化の結果、文学界ではいまものすごい闘争が展開されるに至っている。これまで文学界に君臨してきた文学者たち、作家同盟の指導者たちの多くが、いまは責任を問われ、批判されている。文壇の〝不可侵の〟の作家たちが非難の矢面に立たされているのだ。もちろん彼らの方も黙ってはいず、猛烈な反撃に出ている。他方では、当初ペレストロイカに賛成していた文学者たちが、その進め方をめぐって左右に分裂し、論争を展開している。それらが入り組んで展開されている闘いはきわめてはげしいもので、「内戦」と形容されているほどなのである。そこで本書では、主としてそのようなソビエト文学界の争いと革命的な変化に照準を当て、現在いかに文壇で闘争が進められているか、いかに社会主義リアリズム的御用文学が崩壊し、世界中で人気を得ていた伝統的ロシア文学が復興しつつあるか、その一端を述べてみようと思うのである。それと共に、

一般にペレストロイカの進行状況と問題点に関しても考察し、スペースの許す限り叙述して行きたいと考えている。

目次／ペレストロイカの文学

はじめに

第一章　ソビエト文学界のペレストロイカ……一五
一　ゴルバチョフの登場とペレストロイカ政策……一六
二　文学界指導部のにぶい対応……一九
三　ペレストロイカへ動き出した文壇……二四
四　様変わりしてきた文学界……二五
五　過去の批判の競い合い……二八
六　全ソ作家大会でのペレストロイカ論議……三四
七　ソビエトの文芸政策と〝書記文学〟……四八

第二章　一九八五、八六年のペレストロイカの文学……五五
一　停滞期の文学……五六
二　歴史小説の隆盛……五八
三　八五年の文学、評論の優位とラスプーチンの『火事』……六一
四　八六年のペレストロイカの文学概観……六六
五　犯罪世界についての小説――アスターフィエフの『悲しき刑事』――……七〇
六　麻薬問題と宗教をテーマにした小説――アイトマートフの『処刑台』――……七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　スターリン物の登場――ベックの『新しい任務』……七八
八　公害問題についての『キテジ市のきれいな水』……八二
九　その他の主要作品――ブィコフ、ベローフ、タチヤーナ・トルスタヤなど――……八四

第三章　一九八七年のソビエト文学界の状況……八九
一　ペレストロイカ積極推進の言……九〇
二　ポストに居座ったままでのペレストロイカ……九二
三　無味乾燥な文学の賑わいの原因――T・イヴァノヴァの発言――……九五
四、顕在化したグループ間闘争……九八
五　国外亡命者文学の非難……一〇一
六　ペレストロイカ反対派の反撃……一〇五
七　作家同盟指導部のペレストロイカへの抵抗……一〇八
八　文壇の保守派と改革派のせめぎ合い……一一一
九　本格的なスターリン批判の幕開け――過去の過ちの清算――……一一八
十　ゴルバチョフらの限定つきのスターリン批判……一二一

第四章　一九八七年のペレストロイカの文学……一二五
一　スターリン時代のルィセンコ主義を批判する小説の登場……一二六

二　農業集団化による悲惨な犠牲を描いた長編……一三五
三　共産主義社会建設についての黙示録的小説……一四四
四　粛清時代についての小説……一四七
五　少数民族の移住に関する小説とコンピューターによる福音書分析の小説……一五六
六　八七年のその他の作品……一五九

第五章　一九八八年のソビエト文学界の状況……一六一
一　ペレストロイカの危機――反対派の動きの活発化と民族派の攻勢――……一六二
二　出版事情の変化……一六六
三　ますます激越化する改革派保守派の対決、脅し発言……一六八
四　宗教復興の兆し……一七二

第六章　一九八八年のペレストロイカの文学……一七七
一　スターリン時代の人間の運命とユダヤ人問題の小説……一七八
二　スターリンのテロの詳細な報告小説……一八四
三　共産主義的ユートピア建設の破綻――プラトーノフの『チェヴェンゲル』――……一八九
四　秘密警察の活動とラーゲリについての小説……一九三
五　スターリン治世下の恐怖の町についての小説……二〇一

六　異色のユーモア小説――イスカンデルの『チェゲムのサンドロ』……二〇四
七　初めての本格的なスターリンの評伝――ヴォルコゴノフ『大勝利と悲劇』……二〇九
八　回想録がはやり出した文壇……二一四
九　ロシア回帰志向の出現――リハチョフのロシア文化論……二一八
十　スターリニズム的諸現象を描いた作品……二二一
十一　その他の文学の概観……二二五

第七章　一九八九年のソビエト文学界の状況……二二九
一　スターリニズムの犠牲とその清算……二三〇
二　ペレストロイカ批判派、親ロシア派、あるいは民族主義者たち……二三四
三　文学界の闘争、民族問題……二四〇
四　ソルジェニーツィンの解禁……二四三
五　文学界の闘い、新たな西欧派と〝スラヴ〟（ロシア）派、……二四七
六　雑誌『十月』をめぐる論争……二五一
七　作家同盟の改革をめぐる争い……二五八

第八章　一九八九年のペレストロイカの文学……二六三
一　ラーゲリについての世紀のドキュメント……二六四

二　農業集団化の実態についての書――ベローフの『大転換の年』――……二六六
三　ロシア告発の問題小説――グロスマンの『万物は流転する』――……二六九
四　若い頃のスターリンについての小説――ベックの『次の日に』――……二七三
五　二つのスターリン伝、……二七七
六　その他の八九年の作品……二八四
七　哲学の復興の兆し、作家の往来の自由化など……二八七

特別寄稿　ペレストロイカ時代の詩文学――失なったものと獲得したもの――
エヴゲニー・ユルコーフ……二九一

一　読者、詩文学、および社会・政治的な状況……二九二
二　〝帰ってきた〟詩……二九七
三　現代ソビエト詩人たちの帰ってきた詩――コルニーロフ、シャラーモフ――……三一二
四　亡命詩人たちの詩の帰還――ガーリチ、ブロッツキー他――……三一八
五　今日の詩壇――ヴィソッツキー、その他――……三二三

むすび……三三三
一　ペレストロイカの危機……三三四
二　作家同盟分裂の危機……三四〇

三　社会主義リアリズムの瓦解……三四九
四　ペレストロイカの文学の総括にかえて
——最近の動き、ロシア文学の伝統の復活、国の再生に向けて——……三五四
あとがき……三六一
作家名索引……三七二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com